

## 折 伏 要 文 (4)

法華講夏期講習会 第四期(平成18年6月18日)

皆さん、おはようございます。

毎回、講義の始まる前に少しくお話をしているわけではありますが、私が日頭上人猥下の後をお承けして総本山に入りましたのが今年の十二月十六日でございます、今日は六月十八日ですから、それから半年と二日が経ったということで、とりあえず半年を過ごすことができました。

その間、私といたしましては、日頭上人猥下から御下命賜った平成二十一年の御命題である「地涌倍增」と「大結集」は、何としてでも達成していかなければならないと、このように考えている次第であります。

就中<sup>なかんずく</sup>、地涌倍增と大結集の二つの中でも、特に地涌倍增ということが大事ではないかと思えます。つまり大結集と言いましても、地涌倍增の伴わない大結集は、これは結局、単なる数集めだけの、実のない大結集になってしまいます。実の伴った地涌倍增の大結集を果たすためには何が必要かと言え、これはもう折伏以外にないわけです。

そこで今回、私の教材といたしまして『折伏要文』を挙げて、平成二十一年までの残り三年間を、皆で折伏に打って出て、何としてでも地涌倍增を果たしていく。地涌倍增が立派に果たせれば、あとは大結集は簡単であります。そして御命題にお応えしていきたいと考えている次第であります。

皆さん方も各支部において指導教師や講頭さん、さらには幹部の方々などから、常々「折伏をしなさい」と言われているでしょう。しかし、この折伏ということは、私たちが勝手に「しなさい」と言っているのではないのです。

私たちは、折伏の意義をもう少しよく知らなければならないのです。その上からまず原点に立ち返って、そこで御本仏大聖人様は、折伏について何とおっしゃっておられるのか。このことを是非とも知っていただきたいと思えます。

ただ単に私たちが声高に「折伏をしなさい」と叫んでいるのではない。御本仏大聖人様が、私たちに對して「折伏しなければ幸せになれないぞ」と、このようにおっしゃっているということをお伝えしたいと思ひまして、今回、このように『折伏要文』を挙げた次第であります。

それでは、テキストの十二ページをお開きください。今日は、そこにある『南部六郎殿御書』からになります。それでは拝読いたします。

### 南部六郎殿御書

「眠れる師子に手を付けざれば瞋らず、流れにさ<sup>い</sup>を<sup>竿</sup>立てざれば浪立たず、謗法を呵責せざれば留難なし。『若し善比丘あつて法を壊る者を見て置いて呵責せずんば』の置の字ををそれず<sup>畏</sup>

## んば今は吉し、後を御らんぜよ、無間地獄は疑ひ無し」(御書四六三<sup>す</sup>一行目)

これは非常に厳しい御言葉でございます、ここで大聖人様は「折伏をしなければ無間地獄は疑いなし」と、ここまでおっしゃっておられるわけです。この「眠れる師子に手を付けざれば瞋らず、流れにさを<sup>よ</sup>立てざれば浪立たず」というのは当然の理でありまして、やはり折伏は、私たちが「動く」ということが大事なのです。私たちは、座していたのでは絶対に幸せを掴むことはできない、折伏も達成することはできないわけです。

そもそも仏法、すなわち信仰というのは実践であり、体験なんです。行動なんですね。極端なことを言うと、信仰から実践というものを取ってしまったら、それは信仰ではないのです。

それでは信仰とは何か。信仰とは観念ではないんです。まず一番基本になるのは、御本尊様の前に端座して、きちっと正座をして、そして手を合わせて御本尊様を見つめ、南無妙法蓮華経と唱える実践なんです。ですから「寝ながら勤行をした」なんていう話は聞いたことがないでしょう。それだったら誰でもできてしまいます。けれども、そうではない。まさに実践、体験なんですね。

ですから、動かなければだめなんです。自行化他という上からも、まさに私たちが打って出ていかなければ折伏はできません。大体、末法の衆生というのは、本<sup>ほん</sup>未<sup>み</sup>有<sup>う</sup>善<sup>ぜん</sup>の衆生ですから、相手のほうから法を求めて来ることなどはないのです。ここにも大勢の方がいらっしゃるけれども、自ら法を求めて入信したという方がいたとすれば、それは本当にごく稀<sup>まれ</sup>な方なのです。

やはり、私たちがきちんと折伏に打って出て、そして「あなたの行っている信仰は間違いですよ」「あなたの信仰に対する考え方は間違いですよ」と指摘して、「大聖人様の仏法でなければ幸せにはなれませんよ」ということを私たちが積極的に言っていかなければ、折伏にはならないのです。やはり、実践ということが大事なのです。

ですから、この御文にあるように、ただ座しているだけでは絶対に幸せは掴めないわけです。もちろん、寝ていれば怪我はしません。立ち上がって動き出せば、怪我はするかも知れない。つまりいて転んだりすることもあるかも知れない。けれども、ずっと寝ていたのでは、その人は目的地に着かないのです。やはり、私たちは勇気を振り絞<sup>しぼ</sup>って立ち上がり、目的地に向かって歩いて行かなければだめなのです。

その中では、いろいろなことが起きて来る。だからといって、それを怖<sup>こわ</sup>がって寝ていたら、その人は一生だめになってしまうのです。まさに「眠れる師子に手を付けざれば瞋らず、流れにさを<sup>よ</sup>立てざれば浪立たず」、何もなければかも知れないけれども、その人はそれで終わり。一生成仏は絶対に果たすことができないのです。そういう意味で、謗法可責をしなければ留難がない、いろいろな問題、様々な難も起きてこない、こういうことであります。

そこで大聖人様は「若し善比丘あつて法を壊る者を見て置いて呵責せずんば」の文を引かれた上で、この「置の字ををそれずんば今は吉し」、つまり、そのまま知らん顔をしているならば、今はいいだろうと。けれども「後を御らんぜよ、無間地獄は疑ひ無し」と仰せなのです。ですから、魔を恐れていたのでは絶対に幸せは掴めず、無間地獄は疑いないということでもあります。

私たちは、信仰に自信を持っていないとだめなんです。仏が魔に負けることはない、絶対に魔

は仏には勝てないのです。ですから、我々は信仰に対してもっと自信を持ち、この大御本尊様を信仰しているんだという確信を持って、それで魔に立ち向かって行けば、魔は怯<sup>おび</sup>えてしまうのです。我々は、そういうことをよく知らなければならないということでもあります。

ですから、我々一人ひとりが本当に勇気を持って立ち上がって折伏に打って出なければ、今はよくても後はたいへんですよ、無間地獄という恐ろしい結果が待っていますよと、このように大聖人様がおっしゃっているわけです。

これは何回も、言うけれども、ただ単に私たちが「折伏をしなければいけない」と言っているのではなく、仏様がここまで厳しくおっしゃっているということ、よく認識していただきたいと、このように思います。

次に、

### 善無畏抄

「設ひ八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て、大小乗の戒行を尽くし、十方世界の衆生を一子の如くに為すとも、法華經謗法の罪はきゆべからず。我等過去現在未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華經誹謗の罪なるべし」(御書五〇九<sup>ひぼろ</sup>四行目)

この「設ひ八万聖教」というのは、釈尊一代の経々のすべて、仏法全部という意味です。よく「八万四千の法門」と言うように、この「八万」というのは、仏法では「無数」という意味に解釈しております。

ですから「設ひ八万聖教を読み」とは、釈尊一代の経々のすべてを読んだとしてもということです。あるいは「大地微塵の塔婆を立て」、これほど塔婆を立てる人はいないと思いますが、例えばそのように多くの塔婆を立てたとしてもということです。あるいは「大小乗の戒行を尽くし」、この「戒行」とは、戒律を守って修行することです。ですから、これは大乘や小乗のいろいろな戒律を守って修行をするということです。あるいは「十方世界の衆生を一子の如くに為すとも」、これは自分の子供のように慈<sup>いつく</sup>しんだとしてもという意味です。そのようにしたとしても「法華經謗法の罪はきえない」とおっしゃっているのです。ですから、謗法の罪、正法を誹謗するということの恐ろしさというのを、我々はよく知らなければなりません。

そこで「我等過去現在未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くる」とは何かと言えば、これは「偏に法華經誹謗の罪なるべし」とおっしゃっているわけです。我々は、本当に謗法を恐れなければならないということでもあります。

我々は、本未有善、三毒強盛の荒凡夫ですから、過去世を振り返ってみると、様々な因縁を持っているわけです。そういう者は、法華經を一度誹謗したら絶対に救われないのかというと、そうではないのです。そこに法華經誹謗の様々な罪を含めて、いろいろな罪障消滅をしていくのが御本尊の力なんです、題目の力なんです。その力を引き出すのは何かと言えば、それは自行化他の修行なのです。大聖人様の仏法は「自行」と「化他」というように昔から決まっているわけです。

しかるに、これが「自行」だけであったならば、つまり自分のためだけに御題目を唱えるならば、それでは幸せにはなれないのです。小乗の声聞・縁覚と同じになってしまうのです。声聞・縁覚の

二乗が仏様から「お前たちは、永遠に成仏しないぞ」と言われたのは、それは自分のことしか考えていなかったからです。

つまり、あの二乗の人たちは、釈尊が初めに小乗の教えを説かれたことによって、そこに固執してしまったわけです。けれども、釈尊はその後、権大乘の教えや実大乘の教えをきちんと説いているわけです。ですから、仏様の教えの通りに、小乗を卒業して次に大乘の教えに入っていかなければならないものを、一度聞いた話を金科玉条のように頑かたくなに守って自分のことしか行わない。いわゆる化他の行に欠けてしまったわけです。ですから、仏様より「お前たちは自分のためにしか修行をしていないから、幸せになれないぞ、永遠に成仏しないぞ」と言われたわけです。これが法華經に来て初めて十界互具が説かれ、そういった二乗の人たちも、この題目を唱えることによって幸せになれるということになるのです。つまり、末法は自行化他ですから折伏をしなければ謗法の罪は消えないのです。したがって、二乗と同じように自行のみをしていたのではだめなんです。

そもそも折伏というのは、仏様から与えられた尊い使命です。一切衆生救済の慈悲行なのです。御本尊様に対する最高の報恩行なのです。こういうすばらしい修行を行わないということは、自ら幸せを放棄するのと同じなんです。ですから、この法華經誹謗の罪を消滅するためには「折伏をしていく」ということが大事なんですね。

これには不經菩薩の例などもありますが、この次の『開目抄』の御文がそれに近いことをおっしゃっております。では、その『開目抄』の御文を拝読したいと思います。

## 開目抄

**「今、日蓮、強盛に国土の謗法を責むれば、此の大難の来たるは過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし。鉄は火に値はざれば黒し、火と合ひぬれば赤し。木をもって急流をかけば、波、山のごとし。睡れる師子ねむに手をつくれれば大いに吼ゆほ」(御書五七三ノ六行目)**

ここに「今、日蓮、強盛に国土の謗法を責むれば、此の大難の来たるは過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし」とおっしゃっている意味は、法華經の行者が現世に大難を受けるのは過去世の罪障を今生に招き寄せているからであるということです。

我々は、大難を受けても強い信心によってそれを乗り越えることにより、過去世の罪障を消滅することができるのです。折伏することによって己自身の過去世の罪障をみんな消滅することができるのです。折伏することによって非難や中傷、時には様々な難に会うこともあるわけです。それはまさに、この御文の通りなのです。今生にそういった過去世の罪障を全部招き寄せて、強い信心によってそれを消滅していく。過去世の罪障を全部消滅していくことになるのです。

いくら信心をしても、どうもうまくいかないというのは、たいていその人たちは折伏していないのです。「自分のためには一生懸命やるけれども」というのでは、これはまさに二乗の声聞・縁覚と同じなのです。声聞・縁覚の人たちが小乗の教えに執われてしまって、次の大乘の教えについていけなかったような、そんな信心をしていたのでは、本当の幸せは絶対に掴めません。この後の御文にも出て来ますが、末法の修行しょうじゆというのは、摂受ではなく折伏なんです。これを忘れてしまって

はだめなんです。

今、言った通り、折伏をすれば必ず悪口罵詈・非難中傷などいろいろなことがあります。しかし、それは我々がそうやって難を受けることによって過去世の罪障を招き寄せ、そしてこの信心によって消滅させていただくということになるわけですから、我々は、むしろ喜んで難を受けるという決意をもって折伏に臨んでいけばよいということです。

「鉄は火に値はざれば黒し、火と合ひぬれば赤し」。鉄は火に値えば真っ赤になります。やはり鍛えるということが大事なんですね。鉄は熱い火に入れて、打って打ってまた打って、そして日本刀のような強い鋼に仕立て上げられていくのです。

ところが、その鉄も途中の鍛え方が足りないと、立派な日本刀にはならないのです。鍛え方が足りないと、どこかで傷が出て来るのです。そうすると、その刀は、いざという真剣勝負の時に折れてしまうのです。

ですから、信心においてもきっちりと鍛えていくことが大事なんですね。信心を鍛えるというのは、まずは朝夕の勤行をしっかりと、その上に折伏を実践していくことです。このような基本的な信心というものをしっかりと行っていけば、我々は必ず一生成仏を果たすことができるということになります。

「木をもって急流をかけば、波、山のごとし。睡れる師子に手をつくれば大いに吼ゆ」。ですから、様々な大難を受けるけれども、それを強い信心で乗り切っていく、そこに我々の過去世の罪障消滅をしていくことができるということです。むしろ、折伏をして難を呼び起こし、その難を強い信心で乗り切っていくことが大事であるということでもあります。

次に、

## 開目抄

「夫、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水をいとう、水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう、折伏の者は摂受をかなしむ。無智・悪人の国土に充滿の時は摂受を前とす、安楽行品のごとし。那智・謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不軽品のごとし。譬へば、熱き時に寒水を用ひ、寒き時に火をこのむがごとし」(御書五七五ノ一五行目)

ここでは、摂受と折伏についておっしゃっているわけです。この摂受と折伏については、日寛上人が『開目抄文段』の中で五義に約して御教示されていますので、少々お話したいと思えます。

日寛上人は、

「問う、若し爾らば、末法も亦、摂受を行はずべきや。答う、摂折二門に就いては古来の義蘭菊なり。今且く五義に約す云云」(御書文段 一八三ノ)

と仰せです。これは「摂折二門」については古来、様々な見解があるので、「五義」つまり教・機・時・国・教法流布の前後に約してこれを示すとおっしゃっているのです。

初めに、「教」の上から摂折二門を判断すると、まず法華経そのものが折伏であるということですから、天台大師が、

「法華折伏、破権門理(法華は折伏して 権門の理を破す)」

と述べているように、これが法華の思想、法華の命であるということです。つまり、法華の教え、思想そのものが折伏であるということです。ですから、教の上から言えば、法華を信仰している者は折伏をすべきであるということをお示しあそばされているわけです。

それから次に「機」の上から言えば、本已有善と本未有善とに分けられるのです。本已有善の衆生、つまり本<sup>もと</sup>に善根のある人たちに対しては摂受でもよいけれども、末法の本未有善の衆生、つまり本より善根がない衆生に対しては折伏をもって当たらなければならないと、このようにおっしゃっているのです。

先ほども言いましたけれども、本未有善の衆生は、自ら法を求めて来ることはないのです。ですから、よく占い師などが街中の歩道などで座っている姿を見かけるけれども、あのように相手を待っていたのでは、折伏はできないのです。そこに私たちは、折伏に打って出なければならないのです。つまり、本未有善の衆生のためには、摂受ではなくして折伏であると、こうおっしゃっているのです。

それから次が「時」ということです。つまり、末法は折伏をする時であると、このようにおっしゃっているのです。そこで大聖人様は、

「末法に於ては大小・権実・顕密、共に教のみ有<sup>な おわ</sup>って得道無し。一閻浮提皆謗法と為<sup>な</sup>り了んぬ」  
(御書 七三六<sup>ぎ</sup>)

と。つまり、末法においては大小・権実・顕密は、共に教えは存在しているけれども、そのようなものは全く役に立たない、一閻浮提がすべて謗法となってしまっていると仰せです。さらに、

「逆縁の為<sup>ただ</sup>には但妙法蓮華經の五字に限る。例せば不輕品の如し。我が門弟は順縁、日本国は逆縁なり」(同)

と。つまり、その謗法である逆縁の衆生のためには、ただ妙法蓮華經の五字に限る、それはちょうど不輕品のごとくであると仰せです。不輕菩薩<sup>たんぎょうらいはい</sup>が但行礼拝をしたように、誰彼構わず下種結縁をして折伏していかなければならない、末法はそういう時であるとおっしゃっているのです。

次が「国」ということです。大聖人様は『開目抄』に、

「末法に摂受・折伏あるべし。所謂、悪国・破法の両国あるべきゆへなり。日本国の当世は悪国か、破法の国かとするべし」(同 五七六<sup>ぎ</sup>)

と、国にも「悪国」と「破法の国」があると仰せです。この悪国の時は摂受でいいけれども、末法今日の日本国は、謗法の者が充満している誹謗正法の「破法の国」なのです。そのような国においては、摂受ではなく、折伏をしなければならないとおっしゃっているのです。

最後が「教法流布の前後」についての御教示です。これは、竜樹<sup>りゅうじゆ</sup>・天親・天台・伝教等も前々に流布したところの教えを破折して、そして正法を立ててきているわけです。お釈迦様も、初めの四十二年間に爾前権教を説いて、その後、法華經を説いてそれを破折したわけでしょう。それと同じなんです。

末法の今日においても、まさに前代流布の爾前<sup>ちやくじ</sup>述門を破折して、そして末法<sup>ちやくじ</sup>適時の大白法、

本門寿量品の肝心である南無妙法蓮華經を弘められたのです。

これは単に弘めるのではなくして、それ以前の間違った教えを破折していくのです。例えば『立正安国論』の「立正」というのは破邪顕正なんです。単に「立正」という二字が存在するのではないのです。つまり、破邪顕正ということが大事なんですね。

そういうふうに「教法流布の前後」から言っても、撰折二門を立て分けていらっしゃるのです。このことを、まず申し上げておきます。

そこでまず「夫、撰受・折伏と申す法門は、水火のごとし」とありますが、これはまさに水と火のようであるということです。

「火は水をいとう、水は火をにくむ。撰受の者は折伏をわらう、折伏の者は撰受をかなしむ。無智・悪人の国土に充滿の時は撰受を前とす、安樂行品のごとし」。無智の者や悪人が充滿する時は撰受を前とすると仰せです。これは『安樂行品』のごとくであるということです。法華經の『安樂行品』には、身・口・意・誓願の四安樂行が説かれておりますが、これらは撰受の部類に属するわけです。

それから「邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不輕品のごとし」。つまり末法今日の邪智・謗法の者の多い時は折伏を前とすると仰せです。そしてこれは『常不輕品』のごとくであるということです。

『常不輕品』には、不輕菩薩が二十四字の法華經を唱えて但行礼拝を行った結果、上慢の四衆から様々な迫害を受けたけれども、それでもなお但行礼拝を行ったその功德によって、不輕菩薩は六根清淨の功德を得て成仏し、またその不輕菩薩を迫害した上慢の四衆も、ひとたびは地獄に墮ちたけれども、再びこの不輕菩薩の教化を受けて成仏したということが説かれているのです。

大聖人様も折伏の行体行儀については、不輕菩薩のことを挙げられております。不輕菩薩は、今、言ったように二十四字の法華經を唱えて但行礼拝を行ったのです。言うなれば、「すべての人に仏性があるのですから、あなたは必ず仏に成れます。ですから私はあなたを敬うのです」と言っただけで但行礼拝をするわけでは、ありません。ところが、それを聞いた者たちは、不輕菩薩に対して迫害を加えるわけでは、ありません。

しかるに、不輕菩薩は決して相手に対して非難中傷をしたり悪口を言ったのではないのです。「必ずあなたは幸せになれる、仏様に成れます」と言っただけにもかかわらず、迫害を受けるのです。

我々の折伏もそうではありませんか。相手のことを真剣に救いたいと思って「大聖人様の仏法以外では幸せになれませんよ」ということを一生懸命に言うのだけれども、文字通り慈悲の心を持って伝えようとするのだけれども、相手からは非難中傷、様々な難を受けるわけでは、ありません。

この難を受けるということは、先ほども『開目抄』の御文にあった通り、過去の罪障がそこに招き寄せられて難を受けるのです。つまり、折伏することによって難を受けるけれども、それを強い信心で乗り越えることによって、我々は過去世の罪障を全部消滅できるのです。そのように折伏は

尊いことなのです。

先ほども言いましたように、折伏していかないと、過去世の罪障も消滅できなくなってしまうのです。「眠れる師子に手を付けざれば瞋いからず」で、放って置けばよいのかも知れないけれども、それでは今はよくても、後は必ず無間地獄に墮ちると、大聖人様がおっしゃっているくらい厳しいのです。ですから、我々は勇気を持って立ち上がり、それを乗り越えて過去世の罪障を消滅していくという、そういう闘いをしていくことが大事であるということになるわけです。したがって「常不軽品のごとし」ということは、こういうことをおっしゃっているわけです。

この摂受と折伏ということは「譬へば、熱き時に寒水を用ひ、寒き時に火をこのむがごとし」とあるように、間違っではいけないとおっしゃっているのです。ですから、教・機・時・国・教法流布の前後の上からいって、今こそ私たちは折伏をしていかなければならないということでもあります。

無智・悪人が多い時は摂受が前であるけれども、邪智・謗法の者が多い時は折伏が前である、それは常不軽品のごとくであると、このようにおっしゃっているのであります。

次に、

### 開目抄

**「末法に摂受・折伏あるべし。所謂、悪国・破法の両国あるべきゆへなり。日本国の当世は悪国か、破法の国かとするべし」(御書五七六<sup>い</sup>一行目)**

先ほどは、教・機・時・国・教法流布の前後の五義の上から申し上げましたけれども、これは日本国は「悪国」なのか「破法の国」であるのかということです。これによって摂受・折伏が大いに異なるということです。そこで、今はまさに折伏が前であるということでもあります。

次に、

### 開目抄

**「問うて云はく、摂受の時折伏を行ずると、折伏の時摂受を行ずると、利益あるべしや」**

これは、摂受をすべき時に折伏を行ずる、また逆に折伏をすべき時に摂受を行ずる、つまり時期を間違えたら利益はあるのかという問いであります。それに対して、

**「答へて云はく、涅槃經に云はく『迦葉菩薩、仏もに白して言もく〇如来の法身は金剛不壊なり。而るに未だ所因しかを知るあたこと能いはず、云何』**

これは涅槃經の文を引かれて、その答えを出していらっしゃるわけです。

最初に、迦葉菩薩が仏様に言うには「仏様の御身体は仏身であられるから金剛不壊であります」と。つまり、金剛石のように強固で何物にも壊れることがないということです。

「而るに未だ所因を知るしかこと能あたはず」とは、「どうしてそのような金剛不壊の仏身を成就することができたのですか、未だその原因を知るあたことができません。それは何でしょうか」と、このように質問をするわけです。

**「仏もの言もさく、迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり」**

仏様が答えられるには「迦葉よ、それは正法を護る因縁をもつての故に、この金剛身を成就す



ることができたのである」と、このように述べられるのです。

**「迦葉、我、護持正法の因縁にて、今、是の金剛身、常住不壊を成就することを得たり」**

ここからが大事なところなのです。つまり「護持正法の因縁によって、この金剛身、常住不壊を成就することができたのである」と。そして、

**「善男子、正法を護持する者は、五戒を受けず威儀を修せず」**

この「五戒」というのは、不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五つの戒です。それから「威儀」とは、これは四威儀や三千威儀などと言うように、戒律のことであります。つまり、これは正法を護持する者は、五戒を受けず、またそのような威儀を修しないということです。

**「応に刀劍、弓箭を持つべし」**

これは「正法を護るためには、五戒を受けたり威儀を修するのではなくして、まさに刀や弓を持って正法を護らなければならない」と、非常に厳しいことをおっしゃっているのです。

**「是くの如く種々に法を説くも」**

これは「その反対にいろいろと立派なことを言って法を説いたとしても」ということですね。

**「然も故、師子吼を作すこと能はず○非法の悪人を降伏すること能はず」** この「師子吼」というのは、正法を説くことです。つまりこれは「しかもなお、正法を説くことができない」、またあるいは「非法の悪人を降伏することができない」ということです。

**「是くの如き比丘、自利し及び衆生を利すること能はず」**

これは「そのような僧侶は、自ら利益を受けることができず、また他の衆生をも利益することができない」ということです。つまり、その時や機根に応じて、折伏をしなければならない時に折伏をせず、ただ座して五戒を受けたり、あるいは四威儀や三千威儀などを修していたのではだめですよ、とおっしゃっているのです。要するに、折伏をしなければ本当の幸せは掴めないということです。

**「当に知るべし、是の輩は懈怠懶惰なり」**

刀劍や弓箭を持たなければならない大事な時に、何もしないでただ座しているだけでは怠け者になってしまうということです。

**「能く戒を持ち浄行を守護すと雖も、当に知るべし是の人は能く為す所無からん」**

清らかな行いをしていても、正法を破る者が出てきたときに、それを破折しなければ、正法を護ったことにはならないぞと、このように御教示であります。それから、

**「乃至、時に破戒の者有って是の語を聞き已はって、咸共に瞋恚して是の法師を害せん」**

時に破戒の者がいて、この言葉を聞き終わって皆共に瞋りの心を抱き、その法を説いた法師を殺害したということです。

**「是の説法の者、設ひ復命終すとも、故持戒、自利利他と名づく』等云云」**

しかし、この説法をした者は命が終わったとしても、この者こそ真の持戒者であり、自らも利益を受け、そして他人をも利益せしめる者であると言うべきであると、このようにおっしゃっております。

**「章安の云はく『取捨得宜不可一向』等」**

これは「取捨宜しきを得て一向にすべきではない」とおっしゃっているのです。つまり、摂受と折伏については、きちんと機かなに適い、時に適う方法を用いるべきであるということです。

**「天台云はく『適時而已』等云云」**

つまり「折伏を行ずるか摂受を行ずるかは、時によるのである」と、このようにおっしゃっているのです。

**「譬へば、秋の終わりに種子を下し、田畠をかえさんに稲米をうるることかたし」**

これは当たり前ですね。秋の稲刈りの時期に種を蒔いて田畠を耕しても、稲米を得ることはできないということです。

**「建仁年中に、法然・大日の二人出来して、念仏宗・禅宗を興行す」**

この「大日」というのは、大日房能忍という禅宗の者のことです。この大日と法然の二人が出てきて、禅宗や念仏宗を弘めたということです。

**「法然云はく『法華経は末法に入つては、未有一人得者・千中無一』等云云」**

そこで法然は「末法に入つてからは、法華経によって得道した者は未だ一人もいない、千人のうちの一も得道する者はない」と、このように言ったわけです。

**「大日云はく『教外別伝』等云云」**

さらに大日房能忍は「教外別伝」などと言ったわけです。

この「教外別伝」というのは禅宗の教えです。「教外別伝、不立文字、直指人心、見性成佛」といういい加減な教えが禅宗にあるわけです。つまり、これは仏の本意は教説を用いずに伝えられてきたということで、言葉や文字によって明らかになるものではないという邪説であります。

**「此の両義、国土に充滿せり。天台・真言の学者等、念仏・禅の檀那をへつらいをそるゝ事、犬の主にををふり、ねづみの猫ををそるゝがごとし」**

天台や真言の学者たちは、犬が主人に尾を振るように、盛んになってきた念仏や禅の檀那に諂へつらっているということです。

**「国王、将軍にみやつかひ、破仏法の因縁、破国の因縁を能く説き能くかたるなり」**。そして、国王や将軍に仕えて、破仏法の因縁、破国の因縁をよく説いているということです。

**「天台・真言の学者等、今生には餓鬼道に墮ち、後生には阿鼻を招くべし」**(御書五七六之三行目)

つまり「仏に仕えるべき天台・真言の学者等がこのようであれば、今生には必ず餓鬼道に墮ち、そして後生には阿鼻を招いてしまう」と、このようにおっしゃっているのです。

ここでは要するに、私たちが折伏をするに当たっては何が大切であるかということをおっしゃっているのです。つまり、一つには時を間違えないということ。それからもう一つは、私たちはあくまでも正法を護持する信仰をしっかりと持って折伏をしていかなければならないということをおっしゃっているわけでありませう。

では、次にまいります。

**開目抄**

「<sup>たと</sup>設ひ山林にまじわって、一念三千の觀をこらすとも、<sup>くうげん</sup>空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機を<sup>わきま</sup>しらず、撰折の二門を弁へずば、いかでか生死を離るべき(御書五七六頁一六行目)

これも「撰新二門」、すなわち撰受と折伏を間違えてはならないということをおっしゃっているわけです。

つまり、たとえ山林に交わって端座をして<sup>ちん し もつこう</sup>沈思黙考し、一念三千の觀法を修したとしても、あるいは静かな所にあつて三密を一心不乱に一生懸命修行したとしても、時機も判らず、撰折の二門も弁えなければ、生死を離れることはできないということです。ちなみに、この「三密」とは、密教におけるところの秘密の三業と言ひまして、身密・口(語)密・意密の三つのことでもあります。

要するに、ここでは「撰折の二門」をしっかりと弁える、つまり末法の今日は折伏の時であるということをおしやうのであります。

次に、

### 佐渡御書

「<sup>しょうじゆ</sup>仏法は撰受・折伏時によるべし。<sup>たと</sup>譬へば世間の文武二道の如し。されば昔の<sup>だいしょう</sup>大聖は時によりて法を行ず」

つまり、仏様は時に応じて教えを行じてきたということです。

「<sup>せつせんどうじ</sup>雪山童子・<sup>きつた</sup>薩埵王子は、身を布施とせば法を教へん、菩薩の行となるべしと責めしかば身をすつ」

雪山童子や薩埵王子は「身を捨てて布施とするならば、法を教えてあげよう」と言われたわけです。そして「身を捨てるのが菩薩の行となるのだ」と、このように、言われたので、身を捨てたということです。

「肉をほしがらざる時、身を捨つべきや」

これは「肉を求める者がいない時に、身を捨てるであろうか」という意味です。そういう時には、身を捨てる必要はないわけですからね。

「紙なからん世には身の皮を紙とし」

紙のない時には、まさに身の皮を紙として書き残すのであると。そして、

「筆なからん時は骨を筆とすべし」

と。このように身を削ってでも法に仕えていくことが大事であるということでもあります。

「<sup>そし</sup>破戒無戒を毀り、<sup>たも</sup>持戒正法を用ひん世には、諸戒を堅く持つべし」

破戒の者や無戒の者を毀り、持戒の者や正法を修行する者を大事にして用いる正法・像法というような世であるならば、諸戒を堅く持つべきである、いろいろな戒律を持つべきだと仰せです。

「<sup>どうあん</sup>儒教・<sup>え おん</sup>道教を以て<sup>ほうどうさんぞう</sup>釈教を制止せん日には、道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く、王と論じて命を軽うすべし」

この「釈教」とあるのは、お釈迦様の教えということで、つまり仏教のことです。

これは、中国において、儒教や道教が非常に盛んになってきて、そこで日本の<sup>はいぶつ きしやく</sup>廢仏毀釈のように仏教が疎んぜられた時があったのです。そのような時には、道安法師や慧遠法師、法道三蔵

等のように、身命を捨てても、それらを諫めなくてはならないということです。

この「道安法師」という人は、北周の武帝が儒教と道教と仏教の三つを論争させた際、『二教論』という書物を作って、儒教と道数を論破したのです。これによって一度は武帝も廃仏毀釈をやめようとしたのですが、結局、武帝は仏教を廃してしまったのです。それでも、この道安法師は命を張って法を弘めたということです。

それから「慧遠法師」という人も、やはり仏教を廃したことに對して武帝を諫めたのです。しかし、結局は疎んぜられてしまったわけです。しかるに、後に仏教の再興を図る文帝によって、また重んぜられるのです。このように、大事な時には、たとえ相手が武帝であろうが命を張って諫め、法を弘めたということでもあります。

それから「法道三蔵」という人は、北宋の徽宗皇帝が廃仏毀釈を行って道教を用いることにしたことに對して、これを諫めたわけです。けれども、結局、皇帝の怒りを買って、顔に火印を押され、道州という所に流されてしまったのです。このように、命を張って法を弘めたわけです。

要するに、このような時には身命を捨てても王を諫めなくてはならないということで、故に「王と論じて命を軽うすべし」と仰せであります。

**「釈教の中に小乗・大乘・権経・実経雜乱して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を弁へざる時は、天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顕密を強盛に分別すべし」**

これは、仏教の中において小乗・大乘・権経・実経が入り乱れて、明珠と瓦礫や、牛と驢馬の乳の見分けがつかないような時には、つまり正邪の見分けがつかないような時には、天台大師や伝教大師のごとくに、大乘と小乗、権教と実教、顕教と密教を強盛に分別して折伏をしなければならないという意味です。

**「畜生の心は弱きをおどし強きをおそる。当世の学者等は畜生の如し」**

これは当世の学者は皆、畜生が弱きを脅し、強きを恐れるように、政治権力などの力のある者に諂って、まさに畜生のごとくであると仰せられるのです。

**「智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる」**

これは、智者が弱い立場にあることを侮って、王法の邪を恐れているということです。

**「諛臣と申すは是なり」**

要するに、権力のある者の言うことに對しては、誤りであっても正しいと言って、媚び諂う者を「諛臣」というのであると仰せになっているのです。

**「強敵を伏して始めて力士をしる」**

ここが大事なんですね。折伏というのは、やはり恐れを抱いたら絶対にできないのです。何回も言いますがけれども、私たちは少なくとも末法の御本仏大聖人様の仏法を護持しているわけですから、私たちには仏様の御加護があるのです。ですから、どんなに強い魔が競ったとしても、魔は絶対に仏には勝てないわけですから、堂々と折伏をしなければいけないのです。

ところが、世間の状況に左右されて、権威を恐れてしまったりするのです。例えば、相手が社長や学者なんかだと気後れしてしまって折伏ができなかったりするわけです。そこで、こっちが勝手

に折伏する相手を選んでしまうのです。だからと言って、話しやすい人に対しては、折伏をしているのかと言えば、そうでもないのです。

ですから「強敵を伏して始めて力士をしる」。つまり、強い敵を倒してこそ、力があるということが判るのです。皆さん方にも大事な親友がいるでしょう。ところが、その親友に限って折伏をしない人が多いのです。あるいは、親に限って折伏をしない人がいるのです。これは本来、逆ですよ。けれども、折伏すると関係が壊れてしまうなどと勝手に思って、折伏しない人がいるわけです。

そうではないんですね。本当に相手のことを思うのであれば、これは折伏をしなければだめなのです。それをやらないから、どうしても弱い命になってしまって、それが何から何まですべてに渡ってしまうのです。これでは、本当の折伏はできません。

ここに出て来た道安法師・慧遠法師・法道三蔵といった人たちのように、本当に決死の覚悟を持って行えば、むしろ結果的には相手は喜んでくれるのです。それからもう一つ大事なことは、その時に反対し、非難中傷したとしても、折伏は逆縁成仏であるということ覚えておいていただきたいと思います。

**「悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人<sup>かとうど</sup>をなして智者を失はん時は」**

これは「邪法の僧侶などが、悪王に味方して智者を滅ぼそうとしている時は」ということです。

**「師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」**

つまり、あらゆる障魔を乗り越えて、悠然<sup>ゆうぜん</sup>として広布へ向かって前進をしていく破邪顕正の信心が「師子王の如くなる心」です。

その師子王の心を持てる者は、必ず仏に成ることができるということです。したがって、勇気を持って折伏をなささいということです。

**「例せば日蓮が如し。これおごれるにはあらず」**

これは「おごり高ぶって言っているのではない」ということです。

**「正法を惜しむ心の強盛なるべし」**

つまり「正法を惜しむが故に、このように述べているのである」ということです。

**「おごる者は必ず強敵に値ひておそるゝ心出来するなり」**

そして「おごり高ぶっている者は、強敵に出会って必ず恐れをなす」ということです。ですから、御題目を唱えていなければ、強敵に出合って必ず恐れる心が出てしまうのです。

**「例せば修羅のおごり、帝釈<sup>たいしゃく</sup>にせめられて、無熱池<sup>むねつち</sup>の蓮<sup>はちす</sup>の中に小身と成りて隠れしが如し」**

これは「例えるならば、阿修羅が帝釈天に攻められて、結局、尻尾を巻いて無熱池の蓮の中に入って、身を小さくして隠れてしまったのと同じである」ということです。

我々の信心も同様なのです。しっかりと御本尊様を拝して御題目を唱え、勇気を持って立ち上がれば、我々の身体や心は、相手から何倍も大きく見えるのです。しかるに、信心が足りずに、自分が阿修羅のように小さくなってしまっているのは、相手を折伏することはできないのであります。

**「正法は一字一句なれども時機に叶ひぬれば必ず得道<sup>成</sup>なるべし。千経万論を習学すれども時機に相違すれば叶ふべからず」(御書五七八ノ一五行目)**

要するに、末法は折伏の時であるということです。ですから、御題目をしっかりと唱えて、そしてその御題目の功德と歓喜を持って折伏に出て行くことです。末法の時、まさにこの自行化他の信心なのです。就中<sup>なかんずく</sup>、折伏をしなければ、私たちは一生成仏を果たすことはできないということを、よく肝に銘じていただきたいと思う次第であります。

特に今、平成二十一年の大佳節まで残り三年という大事な時を迎えております。本日の私の講義の後には指導会が開かれますので、それらのお話もよく拝聴して、そして皆さん方には今日から折伏を率先垂範<sup>そつせんすいはん</sup>して行じて行っていただきたいと思っております。

今日、拝読した御文以外のところも、朝夕の勤行の折に、たとえ一つでも結構ですから拝読をして、折伏の気持ちをしっかりと御本尊様にお誓い<sup>ちようせき</sup>していただきたいと、このように思う次第であります。

皆さん方のいよいよの強盛<sup>ごうじょう</sup>なる信心をお祈りいたしまして、今日の話を終了いたします。